日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所　日本産業衛生学会九州地方会
〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
産業医科大学産業生態科学研究所
労働衛生工学研究室
TEL (093) 691－7459
FAX (093) 602－1782
発行責任者：地方会長　田中　勇武

（題字　倉 恒 匡 徳　筆）

脚気対策の功労者　高木兼寛（たかき かねひろ）
－日本の疫学の父－

日本産業衛生学会 生物学的モニタリング・バイオマーカー研究会 会長　**加 藤 貴 彦**
（熊本大学大学院 医学薬学研究部 公衆衛生・医療科学分野）

熊本県出身の偉大な医学者として北里柴三郎がいる。私の前任地であった宮崎には、北里と並ぶ医学者として高木兼寛がいる。高木は脚気対策に成功し、世界８大ビタミン学者として南極大陸にも名前を残している人物である。また慈恵会医科大学の前身である医師養成所や、日本初の看護学校を創設するなど医療の発展にも力をつくした。昨今、東国原知事で脚光をあびている宮崎県だが、元来ひかえめな県民性もあり、あまり高木のことは知られていない。是非この機会に、ひとりの偉大な医学者を紹介したい。

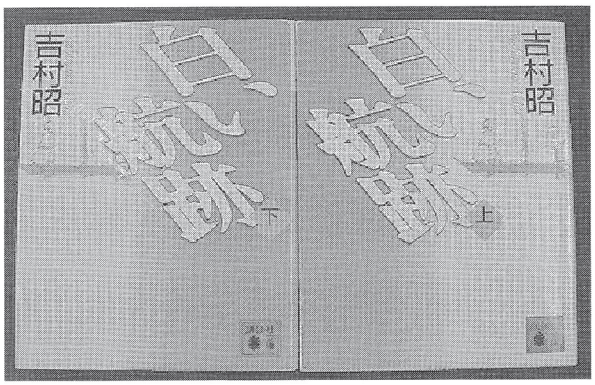
高木兼寛は、宮崎県高岡町（現在は宮崎市）出身の海軍軍医である。今でこそ脚気の原因はビタミンB1の不足であることが明らかにされているが、明治時代は原因不明の病気として、たいへん恐れられた。イギリスへの留学経験のあった高木は、イギリスでは見られなかった脚気の原因が和食にあると考え、特に「白米」に注目した。高木は自分の仮説を証明するため、大量の脚気患者が発生した「戦艦龍驤（りゅうじょう）」と同一航路をとる「戦艦筑波（つくば）」で、白米に麦を加える」という新しい食事療法の導入を試みた。その結果、「筑波」乗組員の脚気患者は激減し、その原因が白米食にあることを明らかにしたのである。そして、高木は海軍の食事を米・麦混合食と変更し、脚気患者を減らすことに成功した。一方、陸軍軍医首脳　森林太郎（鴎外）は、白米主体である和食の優位性を実験研究によって証明し、高木の説を“統計にもとづく学理なき説”と非難した。陸軍では高木の学説を採用することなく白米食を続け、その後も多くの脚気患者を発生させることになる。

高木の行った研究の特徴は、おそらく日本で初めて因果関係の証明に疫学（易学ではない！）を用いたことである。それまで、医学における因果関係の証明には、病理学的な方法が重要とされ、原因の究明に主眼がおかれた。しかしよく考えてみると、原因の確定は必ずしも疾病予防に必要ではない。疫学的方法の利点は、病気の原因やメカニズムが確定できなくても、“合理的に考え、ある程度の事実関係（蓋然性説）が認められれば原因と定め”、疾病の対策が可能になることである。つまり、ビタミンB1不足という脚気の原因がわからなくても、患者を減らしたところに最大のポイントがある。高木は原因の解明よりも、脚気患者を減らすことを優先したのである。

日本ではこれまで病因（実験）研究に力点がおかれ、疫学研究の評価が低い歴史がある。最近こそ、EBM (Evidenced Based Medicine) という言葉が有名になり、疫学が注目されるようになった。我々産業医学に携わるものとしては、原因究明よりも疾病予防、研究結果の社会還元を重視したい。高木は日本の疫学の父ともいえる人物なのである。

脚気の原因をめぐる高木兼寛と森林太郎（鴎外）との学問的対決が　吉村昭著“白い航跡”に描かれている。脚気論争には北里も深い関わりがあり、その後の彼の人生に大きな影響を与えることになる。機会をみつけ、一読してほしい。

写真は宮崎県宮崎市の宮崎市立穆佐（むかさ）小学校にある高木兼寛の胸像である



白い航跡（上・下）講談社文庫　吉村昭著

地方会長あいさつ

第82回日本産業衛生学会総会にむけて

九州地方会長
第82回学会総会企画運営委員長 **田 中 勇 武**
(産業医科大学 産業生態科学研究所 労働衛生工学)

日本産業衛生学会は、来年2009年に創立80周年を迎えます。誠に喜ばしいことであり、ここまで、この学会の発展にご尽力いただいた諸会員に謝意を表する次第です。この節目の年に、九州地方会が第82回学会総会を開催出来ることは、誠に光栄です。

学会も傘寿をめでたく迎えるということになります。このような機会に、日本の現状をにらんで、第82回総会のメインテーマを、「超高齢社会を迎える日本 その産業保健戦略は」としました。

このテーマの選定に当たっては、九州地方会の会員の皆様にテーマ候補を呼びかけお願い致しました。応募いただいたテーマは、実に50テーマに達しました。九州地方会会員の82回学会総会にかける熱意がひしひしと伝わり、本当に感謝申し上げます。その中から1つのテーマに絞り込むことは容易ではありませんでしたが、日本がおかれている現状、これから産業保健が真正面から取り組まねばならない最重要課題は何かと考え、今、きちんとしたロードマップを描いておかなければ、手遅れになるということで、このテーマを選定しました。提案者の言葉を借りながら、その趣旨について述べます。

我が国の高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）は20.8％に達しています（2006年）。日本の高齢化率は、今後も上昇を続け、2055年には40.5％に達すると予測されています。加えて、4人に1人（26.5％）が75歳以上の超高齢社会を迎えると推計されています。この様な人口の高齢化は、労働力人口にも大きな波紋を投げかけています。たとえば、1998年における15歳以上60歳未満の労働力人口と同じ労働力人口を2015年に確保するためには、60～64歳の全ての人々と、さらに65歳以上の10％が働かなければならないだろうとも言われています。

国は、定年年齢を段階的に65歳に引き上げる改正を施行し、2013年に、全ての人の定年年齢が65歳になります。さらに、定年を70歳まで引き上げる動きも始まっています。総じて、意欲と能力のある高齢者が、いくつになっても働ける社会の整備が必要と判断していると考えられます。高齢者の意識も、65歳を超えても働きたい、年齢に拘らず、元気ならば、何時までも働く方がよいとする人が多く、働く意欲は極めて高いと思われます。

一方、企業にとっては、高齢者が身につけている知識、技術、ノウハウ等を活用できるプラス面もありますが、すべての高齢者の雇用を確保する状況にはないように見えます。

これらの状況を踏まえて、産業保健の視点から考えなければならない課題として(1)健康資源の増進 (2)ワークアビリティとエンプロイアビリティの客観的な評価に基づく賃金・処遇の設定等を含む人事・労務管理のあり方 (3)高齢労働者を意識した労働衛生管理の再構築等が考えられます。

これらの解決策として、企業と労働者のお互いが、暦年齢を意識することなく、働くことの出来る雇用環境つくりと、そこから作り出される高い生産能力を確保することにあります。いわゆるエイジフリー職場の創生です。

その際、産業保健はどのような戦略を立て、実践していかなければならないか、スペシャリストである学会員が一堂に会する場において、英知を結集して議論し、方向を見いだすことは大きな意義があると信じています。

掲げられたテーマにご理解いただいて、第82回学会総会を実りあるものにしていきたいと考えています。日本が迎える超高齢者社会が、穏やかで住みやすい誇りを持てる社会となる一助となればと願っております。

2009年5月20日～23日福岡国際会議場で開催される学会総会が、盛会裏に終了しますように会員皆様のご協力をお願いします。

ごあいさつ

佐賀の時代です

市 場 正 良
(佐賀大学 医学部 社会医学講座)

佐賀大学医学部社会医学講座環境医学分野教授となりましたご挨拶をさせていただきます。友国勝麿前教授の後任として10月に就任いたしました。産業医学・環境医学の教育、研究、実践活動を引き続き担当していくこととなります。これまで地方会では大変お世話になっておりますが、今後も変わりなく、どうぞよろしくお願いいたします。

私は山口県下関出身で佐賀医科大学の3期卒です。佐賀医大、大分医大、産業医大は同時期に開講いたしました。特に産業医大には私と同じ3期生に産業医学分野で活躍されている方達がたくさんおられます。私も若いときから親しくしていただき、教えられることも多く、また刺激を受けることもできるとてもいい仲間だと思っています。

学生の時に臨床医になることよりも機器分析に興味を持ち、卒業後すぐに友国教授の研究室に入りました。生物学的モニタリング研究の指導を受けながら、現場も知らなければということで、佐賀の労働衛生機関の健診に参加したり、作業環境測定に同行したり、産業医をしたりと経験を積んできたつもりですが、まだまだです。そのころ労働衛生コンサルタント制度を知り、どんな試験か知りたいということだけで受験してみました。故馬場先生が面接官でした。良い思い出です。1次試験も受けましたので、法規を端から端まで読んだことは、大変よい勉強でした。

研究面では、生物学的モニタリング研究を中心に行ってきました。多環芳香族炭化水素類暴露の調査で中国鞍山の製鉄所や韓国の焼却炉作業者等の海外調査は印象に残ります。一部は今も継続しております。また佐賀市内のシックスクール調査にも取り組んでおります。

国立大学は独法化により安衛法の対象になりました。私も衛生管理者として活動しています。これまで講義で話していたことを、いざ自分達で無から作るということは大変なことだと改めて実感しております。また国の地球温暖化対策のためのエネルギー削減や環境省のエコアクション21の認定を目指していることもあり、学内の省エネ活動も関わらざるを得ません。これも苦労しております。

医師会産業医研修会や産業保健推進センター研修会では福岡県、長崎県の先生方のご協力も頂いており感謝いたします。引き続きご協力お願いいたします。研修内容もどう向上させていくか悩み多きところです。不安いっぱいのスタートですが、今後とも皆様のご指導よろしくお願いいたします。

受賞のことば

緑十字賞を受賞して感じたこと

堀　江　正　知
（産業医科大学 産業生態科学研究所 産業保健管理学）

このたび、神戸・ポートアイランドで開催された第66回全国産業安全衛生大会（主催：中央労働災害防止協会）において「緑十字賞（りょくじゅうじ）」を受賞いたしました。緑十字賞は、「長年にわたり我が国の産業安全又は労働衛生の推進向上に尽くし、 顕著な功績が認められる個人及び職域グループ等」を表彰するものとされています。私は、産業医科大学を卒業後、15年間の企業勤務時代と６年間の大学勤務時代を通じて、主に産業医の立場から、産業医学のよりよい実践をめざして活動してきましたが、これらの活動を高く評価していただいた㈶産業医学振興財団からご推薦いただき、受賞することができました。20年余りの間、温かく指導していただいた先輩諸兄、多彩な機会を与えて下さった行政・業界・地元・学会の関係者、私を信頼し快く協力してくれた職場の仲間、そして多くの貴重な手がかりを教えていただいた現場の方々に、この場を借りて、心から深く感謝申し上げます。

11月７日㈬にワールド記念ホールで行われた表彰式では、倉内憲孝副会長（元住友電工㈱会長）から受賞者を代表して北村尚人氏（三菱重工業㈱）に賞状が手渡されました。引き続いて、松下電器産業㈱の中村邦夫代表取締役会長による組織改革や企業再生に関する特別講演などもあり、天候にも恵まれた平成19年度の大会には約12,000人も参加して大盛況でした。この日、私にとって特に嬉しかったことは、かつて専属産業医をしていた日本鋼管㈱京浜製鉄所（現：JFEスチール㈱東日本製鉄所）の方々が、表彰式で私のところに駆けつけてくれたことでした。一人は、当時、製鉄所の保全部門で安全衛生を担当する作業長として熱中症対策で苦労を共にした有田博氏で、もう一人は、一緒に新入社員研修を受けてから20年が経った今年４月に安全衛生室長に就任した山岸新一氏でした。社員として同じ釜の飯を食べ艱難辛苦を共にした仲間が、私のことを忘れずに祝福してくれたたことは、受賞にも劣らぬ感激でした。

さて、緑十字賞は、過去の功績に対する表彰制度ですが、これから教育と研究に一層注力したいと考えている未熟者としては、安心してはいるわけには参りません。産業医学は、働く人の健康を確保するために、産業の現場にある重要な課題を検出し、多角的に研究し、現場に成果を還元することが期待されています。幸い、産業医科大学の産業生態科学研究所には、産業医学の発展をめざす学際的な研究者や専門家が集って交流していますし、毎年10～15人の臨床研修修了後２年目と３年目の医師に対する産業医学の卒後修練課程（産業保健研修コース、通称Ａコース）の指導を担当しているので若者の活気にあふれ、その修了者は北九州の地から全国の現場に展開して産業医学を実践し始めました。私は、これらの資源を基盤に、多くの製造現場で長年未解決のままになっている暑熱・騒音・重量物の課題および常に改革を必要としている労働衛生の法制度・政策・倫理の課題にこれからも取り組んでいきたいと考えています。また、本学会の運営に関しては、九州地方会から選出いただいている理事として平成21年度総会をはじめとする諸活動における本部との円滑な連携を、労働衛生関連法制度検討委員会、倫理審査委員会、産業衛生技術部会の主担当の理事として３部門の活性化を、そして温熱環境研究会の事務局として有用な情報の発信と研究会の発展を、それぞれ図っていきたいと考えています。

産業の現場では、人間と職場という元々多様性に富む事象から、時の流れとともに変化する無限の組み合わせが生まれていて、課題は尽きません。個人と組織との均衡ある発展をめざす良心を有する職人が求められる産業医学の実践という分野は、好奇心が旺盛でこだわりの深い私によく合っているような気がしてきました。今回の受賞を好機に、少しだけ自信を深めて後継者の育成に当たらせていただくとともに、自らもさらなる発展が叶うよう精進したいと感じています。

研究紹介・学会報告

第17回産業医・産業看護全国協議会報告

掛　井　真　純
（産業医科大学 産業生態科学研究所 産業保健管理学）

去る2007年11月２日～４日に、東京プリンスホテルおよび東京慈恵会医科大学にて、第17回産業医・産業看護全国協議会（企画運営委員長：三好裕司先生 明治安田生命健康保険組合東京診療所所長）が開催されました。

この全国協議会は平成３年に東京ではじめて開催され、今年の開催で17回目を迎えます。懇親会の席で日本産業衛生学会理事長 清水英佑先生がお話されていましたが、例年春に開催されている日本産業衛生学会が学術的な産業保健に主点を置いているものであるのに対し、この産業医・産業看護全国協議会は現場での実践的な産業保健に主点を置いているものなのだそうです。実際に、今回の協議会のシンポジウム、フォーラムでは、『これからの健康管理・産業保健を求めて』というメインテーマのもと、法改正に対してどのように対応していくべきか、現場の課題を解決するため・ニーズを満足させるためにはどうすればよいか、などについて活発な意見交換が行なわれていました。またポスターセッションでは各企業で行なわれている産業保健活動の紹介や症例報告など多くの実践的な情報が提供されていました。

以下に具体的な例を２つ紹介させて頂きます。

メインシンポジウムでは、特定健康診査・特定保健指導と健康管理－生活習慣病へのアプローチ－というテーマで、行政（一戸和成専門官）・学術的見地（李廷秀先生）・健診機関（三輪祐一先生、渕上博司先生）・専属産業医（宮本俊明先生）の４つの側面から、現状の課題について検討が行なわれていました。実際の制度開始まで半年を切った今でも、多くの課題や問題点が残っていることを改めて認識し、未熟ながらも一専門家として産業医学に携わっている自分に何ができるかを見つめ直す良い機会になりました。

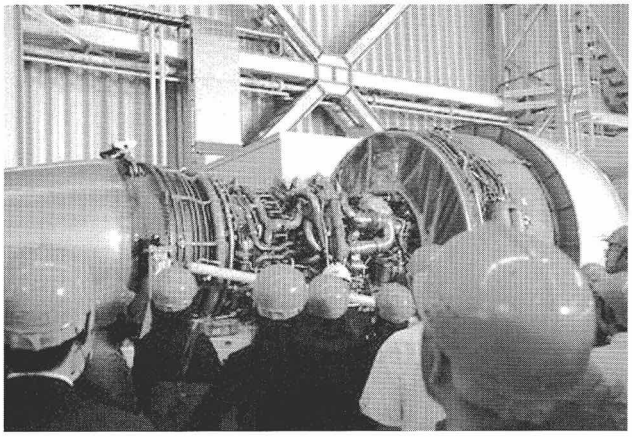
ポスターセッションでは、特定健康診査・特定保健指導やメタボリックシンドロームに関する発表をはじめ、企業

におけるメンタルヘルス対策・過重労働対策、作業条件調査に関する報告、海外の石綿工場の労働衛生管理状況報告など計65題の多岐に渡る事例が紹介されていました。その中で、産業医部会の優秀ポスター賞として選ばれた、『過重労働者の健康リスクマネジメントのためのアクションチェックリストの開発とその評価（筆頭発表者：川瀬洋平先生(三菱化学)）』は、平成20年度から義務化される産業医の選任義務のない小規模事業場における長時間労働者への面接指導体制構築に関するものでした。このアクションチェックリストは、現場の実務担当者の方向性を導き出し、体制構築をサポートするためのツールで、実際の介入研究でもその有用性が検証されているとのことでした。過重労働対策ナビ（http://www.oshdb.jp/）に掲載されていますので、皆さんもぜひ一度ご確認されてはいかがでしょうか。

また、11月３日には専門医認定証授与式が行なわれ、新たに25名の方が専門医として認定されました。

この他、今回の全国協議会で個人的に１番楽しみにしていた企画である実地研修が11月２日に行なわれました。私は、全日本空輸機体メンテナンスセンターの職場巡視をさせて頂いたのですが、整備中の航空機・パーツ、離発着する航空機を間近で見たり、普段は聞けないようなこぼれ話を聞いたりすることができ、硬い研修という雰囲気ではなく、現場の魅力を感じながら楽しく研修をさせて頂くことができました。

最後に、来年の全国協議会は、11月27日～29日に『活力の創出とリスクの低減に貢献する産業保健』をメインテーマに松山で開催されます（企画運営委員長：昇淳一郎先生）。今年同様、多くの方の参加により、会が活力に溢れたものとなるように祈念して、今回の全国協議会の報告とかえさせて頂きます。



日本産業衛生学会専門医紹介

昨年、専門医を取得された九州地方会会員をご紹介いたします。

専門医までの道とこれから

岡　崎　浩　子
(財)九州健康総合センター)

このたび、産業医の専門医の仲間入りをさせて頂ける事になった岡崎と申します。現在は健診機関に所属していますので、産業医業務よりも健診業務に占める時間の方が多いですが、嘱託で複数の会社を担当しています。

産業医の専門医の資格を取るとは、５、６年前の私には想像できませんでした。

産業医の仕事って面白そうだなという印象を持って、産業医科大学の推薦入試を受けたのですが、入学して医学部の授業を受けるうちに、産業医に対する興味よりも、臨床医学（医療）に対する興味が大きくなりました。そのため、卒後の進路には産業医という選択肢はなく、放射線科に入局する道を選びました。患者さんと接触する機会は他の科より少ないものの、扱う分野の広さや検査、画像診断、治療等幅広い仕事内容で楽しく、あっという間の６年間でした。放射線科の専門医を取得したので、その後も資格を生かした仕事をしていくと思っていました。それがどうして産業医を？と思われるかもしれません。当時の教授の方針もあり、放射線科には専門修練医終了後に、専属産業医をしている先輩方が多数いらっしゃいました。修練期間後の就職先の相談で、先輩方の話しを聞いているうちに、また産業医に興味が湧いてきたのです。私に出来るのか不安はありましたが、先輩の勧めて下さるところで専属産業医をやってみようという気になっていました。今思うと、放射線科に入局した時点から、一見共通点のない産業医という道も出来ていたのかもしれません。

会社に就職してすぐに、カルチャーショックを受けました。病院では、個人の能力や技能、責任に任され、全く問題視されないことを、大の大人が大真面目に議論しているのを見て、最初は少し違和感を覚えました。会社という組織、組織としての考え方を体感し、学生から医師として働くようになった時以上の違いを感じました。それまでは仕事をはじめた段階で、社会人になったつもりでいましたが、病院や医局から離れ、会社に就職し、やっと社会人デビューした感じがしました。今までは医局に守られ、業務のみに専念できていたのだと、離れてから気づくことがたくさんありました。また、産業医の仕事をしていると、人間としての未熟さを感じることも多々ありました。自分は産業医に向いてないと思った事もありましたが、元上司の言葉に励まされたのを覚えています。幸いな事に、最初に就職した会社では、あたたかい雰囲気の中で、産業医としてだけでなく、人格的にも尊敬できる先生方に直接指導を受ける事が出来ました。専属産業医をやめ、北九州に戻ってきた後も嘱託で産業医を続け、専門医を取得できたのはそのおかげだと思います。

放射線科医として最先端に携わることはなくなりましたが、会社に就職し、社員・管理職を経験できたことで、視野が広がったことは、私にとって非常に大きな財産だと感じています。産業医になって良かったと思えることのひとつです。今後は、専門医として恥ずかしくないよう精進しながら、ゆっくりでも成長していきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

部会報告

◇産業医部会◇

健康管理研究会報告

産業医部会長　市　場　正　良
（佐賀大学 医学部）

第22回健康管理研究会を産業医部会の主催で12月１日（午前10時から12時半）に福岡交通センタービル大ホールで行いました。福岡産業保健推進センター、佐賀産業保健推進センター、産業医学推進研究会九州地方会の共催と産業看護部会の協力の下に行いました。産業医、産業保健師等92名の参加を頂くことができました。

平成20年度から特定健診、特定保健指導が導入されるということで、昨年の第21回研究会では特定健診に関するパネルディスカッションを行い、多くの方の参加を得ました。その後特定健診、特定保健指導に関する情報も増えてきたところです。今年も引き続き特定健診に関しての講演を２題企画しました。１題目は、九州大学医療情報部の中島直樹先生から、「特定健診・保健指導制度に対応するITシステム」と題し、特定健診・保健指導で利用できるITシステムの具体的な例として、九州大学で開発されたカルナプロジェクトの事例を紹介いただきました。その中で、面接指導システムのデモも行われ、特定保健指導を具体的に理解することができたと思われました。２題目は、産業医科大学産業保健管理学の堀江正知先生から、「産業保健から見た特定健診の課題と対応」と題し、講演１を受けて、特定健診の現状での問題点や最近の動向を解説していただきました。最後に２人の講師を交えての総合討論を行いました。

２人の講師の違う視点からの特定健診の解説により、来年度以後の取り組みのイメージがつかめた一方、問題点も浮き彫りにされ、より理解が深まったと思われます。

今回、私の所属が佐賀大ということもあり福岡、佐賀の２つの推進センターの共催を得ることができ、資金面、広報面での助けとなりました。また、産推研の共催では、産業医への広報、当日の運営でお世話になりました。看護部会と同日、同会場で行うことで参加者の増加を得られたと考えています。来年度も互いに役立つ協力体制を作っていければと考えております。講師の先生、参加者の皆様、関係機関にお礼申し上げます。

◇産業看護部会◇

産業看護部会活動報告

産業看護部会会長　日　笠　理　恵
（福岡県市町村職員共済組合）

産業看護部会では、12月１日㈯午後に福岡交通センター８階大ホール（福岡市）において、福岡産業保健推進センターとの共催で、平成19年度産業看護研究会を開催し、48名の参加をいただきました。

平成20年４月から始まる特定健診・特定保健指導のうち、特に特定保健指導に焦点をしぼりテーマを設定いたしました。

まず「産業保健現場における特定保健指導について」と題し、㈶九州産業衛生協会　福岡国際総合健診センター所属で、福岡産業保健推進センターの相談員でもある柴戸美奈先生からご講演いただきました。柴戸先生は、標準的な健診保健指導プログラムの特徴や特定健診・特定保健指導の内容、特定健診・特定保健指導と事業者の関係など基本的な事項の総説を行い、そして保健指導現場に求められる準備としては、組織内の戦略（目標・方法・評価）を明確にすること、効果が出せる支援メニューや媒体の選定、保健指導中断防止対策、事業場に「保健指導を受ける風土」を根付かせる、などをあげられました。

続いて「あなたならどう取り組む？－特定保健指導－」と題してフォーラムを行いました。外部委託機関の立場から㈲健康栄養デザインオフィスの渡辺純子先生は、事業に取り組むにあたり組織としての目標を確認し経営者を巻き込むことが大切であること、また保健指導では相手の行動をよく観察しその準備性・理解度に合わせてできるところから支援することが重要であり、行動療法プログラムを紹介されました。事業所の立場からアサヒビール㈱博多工場・朝日マネージメントサービスの住徳松子先生は、特定保健指導が今までの業務に追加されるということではなく、それが今までの業務を見直し、応用することで無駄を省くとともに、長年あたためてきた企画を提案する良いチャンスとして、前向きに保健指導の効果をアピールすることを提案されました。保険者の立場から福岡県市町村職員共済組合の日笠は、特定保健指導における参酌標準の達成が職員や所属所の負担に関わることであり、効果ある保健指導の実施を目標として課題を明らかにし、保健指導やその対象者の階層化の視点を確認することに併せて、予算化に向けてそれまでの保健事業の再構築を行うことを紹介いたしました。総合討論では、産業看護師がどのような位置づけになるのか、外部委託機関への委託条件についてなどの質疑が出され、意見交換がなされました。

各演者の話に共通していたことは、まず事業場における目的や現状、自分の業務を見直し、それにあわせて企画提案すること、そして対象者の状況と意欲にあわせた保健指導をしていくことが大切である、またこの事業が産業看護職にとっての好機となることと理解しました。事業所からの参加者も多く、終始熱心に聴講されていました。

◇産業衛生技術部会◇

産業衛生技術部会活動報告

産業衛生技術部会幹事 保 利 一
(産業医科大学 産業保健学部 第1環境管理学)

平成19年11月7日に第16回産業衛生技術部会大会が神戸国際会議場において開催されました。メインテーマは「各業種におけるリスクアセスメント」ということで、加藤隆康実行委員長(㈱グッドライフデザイン)から、本大会の趣旨について説明があったのち、4人の演者にご講演をいただきました。

まず、深堀秀治氏(本田技研工業㈱安全衛生管理センター所長)から、「Hondaにおけるリスクアセスメントの取り組み」と題して、ホンダで行われている作業、設備のリスクアセスメント、化学物質のリスクアセスメント、エルゴノミクス活動について紹介していただきました。次に、橋本晴男氏(エクソンモービル㈲医務産業衛生部 アジア太平洋地区産業衛生アドバイザー)から、「化学業界におけるリスクアセスメント」と題して、エクソンモービル㈲で実施されているリスクアセスメントの方法について、特に化学物質を中心にご講演いただき、問題が大きいリスクの例として、騒音、シリカ粉じん、携帯型ガス検知器の問題点と対策について紹介していただきました。さらに、渡辺邦明氏(㈱神戸製鋼所人事労政部担当部長)からは、「リスクアセスメントの進め方入門」というタイトルで、鉄鋼現場での事例を元に、神戸製鋼所におけるリスクアセスメントの方法の概略と改善事例について、問題点の把握から対策の実施、効果の確認まで、具体例に基づいて解説していただきました。最後に林利成氏(元㈱大林組東京安全研究所所長)から、「建設業におけるリスクアセスメントの現状」と題して、日本の建設業における労働災害の現状、リスクアセスメントの建設業への導入の経緯、イギリス、ドイツの建設業におけるリスクアセスメントの取り組みについてお話していただいた後、建設業におけるリスクアセスメントの考え方、進め方について、危険予知(KY)にリスクアセスメントを取り入れたリスクアセスメントKYという方法を紹介していただきました。全員のご講演が終了した後、総合討論が行われ、フロアからの質疑応答を含む意見交換がなされました。

技術部会大会に先立ち、午前中に第6回産業衛生技術専門研修会があり、「労働衛生保護具は曝露の最後の砦—適正使用してますか」と題して、十文字学園女子大学の田中茂氏、「職場巡視」と題して産業医大の堀江正知氏による講演が行われました。

なお、これまで産業衛生技術部会の大会は、年2回、春の日本産業衛生学会と秋の全国産業安全衛生大会に合わせて開催してまいりましたが、来年度からは、春の学会のときはフォーラムを開催し、技術部会大会は秋または冬に年1回、全国産業安全衛生大会とは別日程で開催することになりました。次回の大会は、平成20年12月13日に東京トラック事業健保会館で開催される予定です。

◇産業歯科保健部会◇

産業歯科保健部会報告

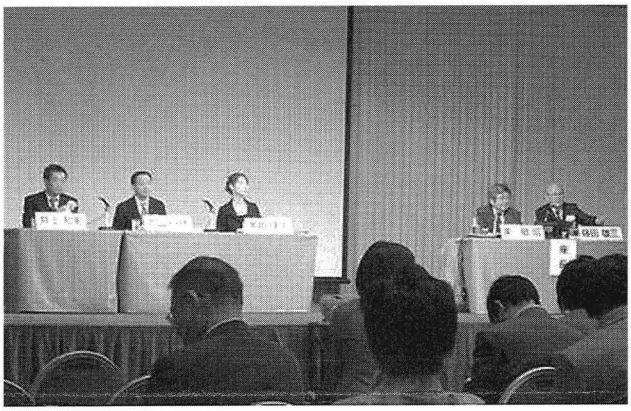
産業歯科保健部会幹事 井 手 玲 子
(産業医科大学 産業生態科学研究所 作業病態学)

今回は11月に東京で開催された第17回産業医・産業看護全国協議会について報告します。部会が発足してはじめての協議会でしたが、様々な場面で歯科関係者の積極的な参加があり非常に実りの多い時間となりました。シンポジウム「口腔保健と生活習慣病－口腔からの健康支援」が東先生(産業医科大学)藤田先生(神戸製鋼所)を座長として開催され、130名以上の参加者がありました。シンポジウムのキーワードは“職種間連携”、医師、歯科医師、保健師それぞれの立場での実践に基づいたご講演は臨場感にあふれ会場のみなさんも興味深く拝聴されていました。井上先生(東京大学)のご講演は、産業医活動の中での気付きから既存のデータを活用して歯周炎と血圧上昇についてのエビデンスを発信するまでのプロセス、またご自身とかかりつけ歯科医との関わりあいのエピソードなど硬軟取り混ぜての奥深く楽しいものでした。青山先生(浜松アクトタワー青山歯科室)からは、診療室以外での幅広い活動そしてその一環である産業歯科活動についてご講演がありました。歯周病専門医としての実績を踏まえて口腔保健を生活習慣病として捉えることの相乗効果やその活動の蓄積されたデータをお示しされました。黒田保健師(日本予防医学協会)が、職域での歯科保健活動を歯科スタッフに一任するのではなく、保健師としての歯科保健に対する考えやその役割について明確に分析されていたのが印象的でした。質疑応答では「お酒を飲む人への歯みがき指導」という話題で会場が盛り上がり、歯科保健を題材に職種の垣根を越えての討議となりました。

また、2日間にわたって実施された職場視察とグループ討論発表の合同セミナーでは、31名の参加者のうち歯科関係者は6名でした。歯科関係参加者の中には初めてお会いする顔ぶれもあり、これも産業保健分野への関心の表れではないかと産業歯科保健部会有志の間では嬉しい驚きがありました。4日に開催されたリレーワークショップでは、「雇用形態(職階)上の問題点と対策」についてグループ討議やコアメンバーによる公開討論が繰り広げられ、産業歯科保健部会メンバーもいろいろな役割でこのワークショップに関わりました。このように協議会には参加型のプログラムがあり、理屈ではなくまず参加してみることが肝要であると感じました。

平成20年6月に北海道で開催される第81回産業衛生学会では、「社会的勾配と口腔保健」(仮)というタイトルで産業歯科保健フォーラムが開催されます。就業層における歯科受診を社会保険や所得などの社会経済的な側面から検討し、酸蝕症や外国人労働者での切り口の講演も盛り込まれ

る予定です。「口腔保健の評価法」（仮）というテーマで産業歯科保健部会研修会も計画されております。それでは、遠い地“北海道”で皆様とお会いするのを楽しみにしております。



研究会・研修会その他案内

平成20年度日本産業衛生学会九州地方会 —産業医科大学創立30周年記念—（第１報）

会　　期：平成20年７月18日㈮～19日㈯
会　　場：産業医科大学ラマツィーニ・ホール
〒807-8555
北九州市八幡西区医生ヶ丘1－1
学 会 長：川本俊弘（産業医科大学医学部衛生学講座教授）
事務局長：小山倫浩（産業医科大学医学部衛生学講座准教授）
事 務 局：産業医科大学　医学部　衛生学講座
〒807-8555
北九州市八幡西区医生ヶ丘1－1
Tel：093-691-7429　Fax：093-691-9341
日　　程：

１日目　７月18日㈮
理　事　会：　12：30～13：30
一般受付：　13：00～
一般口演：　14：00～16：00
教育講演Ⅰ：　16：00～17：00
懇　親　会：　17：30～

２日目　７月19日㈯
一般受付：　9：45～
一般口演：　9：00～10：00
教育講演Ⅱ：　10：00～11：00
教育講演Ⅲ：　11：00～12：00
代議員懇談会：　12：10～12：50
総　　会：　13：00～13：45
一般口演：　14：00～16：00
自由集会：　16：00～17：00

会　　費：参加費　3,000円
懇親会費　5,000円

第82回日本産業衛生学会総会のご案内（第２報）

第82回日本産業衛生学会総会 企画運営委員長
田　中　勇　武

１．会期：学会　平成21年５月20日㈬から22日㈮
特別研修会　平成21年５月23日㈯
２．会場：福岡国際会議場
福岡市博多区石城町2－1
３．メインテーマ：
「超高齢社会を迎える日本　その産業保健戦略は」
４．シンポジウムテーマ募集（９題予定）
応募締め切り平成20年２月末日

連絡先
(1)　本部事務局
〒807-8555　北九州市八幡西区医生ヶ丘1－1
産業医科大学 産業生態科学研究所 労働衛生工学研究室内
第82回日本産業衛生学会　事務局（担当　明星敏彦）
TEL：093-691-7459　FAX：093-602-1782
(E-mail：9chiho@mbox.med.uoeh-u.ac.jp)
(2)　事務局補佐
〒807-0822　北九州市瀬板1－16－1
株式会社アクシス
第82回日本産業衛生学会　登録事務局
（担当　大久保、神田）
TEL：093-603-8761　FAX：093-692-3003

第19回中韓日産業保健学術集談会のご案内

学会名：第19回中韓日産業保健学術集談会
会　期：2008年５月18日㈰～20日㈫
会　場：中国蘇州市　BAMBOO GROVE HOTEL
No.168 Zhu Hui Road, Suzhou, China
TEL:＋86-512-65205601/ FAX:＋86-512-65208778
URL：http://www.bg-hotel.com
学会長：王　生Wang Sheng　北京医科大学教授
事務局：Dept.of Occupational and Environmental Health
Peking University Health Science Center
Beijing 100083 China
TEL:＋86-10-8606-5575/FAX:＋86-10-8280-1533
E-mail：ckj19 @bjmu.edu.cn

テーマ：シンポジウム～　ストレス　Stress
ワークショップ～　健康増進活動
Health　Promotion
抄録締切日：2008年4月15日
参加登録締切日：2008年4月30日
参加登録費：一般US$150　学生US$75
同伴US$60
日本側代表：大久保利晃(財)放射線影響研究所 理事長/
前・産業医科大学 学長
事務局長：東　敏昭
産業医科大学 産業生態科学研究所 所長
申込先：
産業医科大学 産業生態科学研究所
作業病態学研究室
〒807-8555
北九州市八幡西区医生ヶ丘1－1
TEL：093-691-7470　/　FAX：093-601-2667
URL：http：//wshiivx.med.uoeh-u.ac.jp/kjc/index.html
E-mail：kjcjc@mbox.med.uoeh-u.ac.jp

九州地方会理事会報告

平成19年度第2回理事会が、平成19年12月22日(土)午後に福岡メディカルセンター6階第5会議室にて開催されました。主な議題は以下のとおりです。

議題

1）平成19年度第1回理事会議事録要旨案
2）平成19年度事業報告及び決算中間報告
3）平成20年度事業計画・予算案
4）平成20年度地方会開催地について
　会期と会場：平成20年7月18日～19日産業医大にて
5）平成21年度地方会開催地について
6）第82回日本産業衛生学会総会の開催について
　会期：平成21年5月20日から23日
　会場：福岡国際会議場　福岡市博多区石城町2－1
　メインテーマ：
　「超高齢社会を迎える日本　その産業保健戦略は」

編集後記

九月頃、家のクチナシの葉に緑色の大小様々な何かの幼虫を数匹みつけた。幼虫達は若い葉を好んで食べていた。蝶々の幼虫かも知れぬとしばらく見守ることにした。ふと蝶に詳しい知人を思い出し、デジカメの画像をEメールで送付し、その正体を問い合わせた。返事は「これは蛾の幼虫だ、興味があるのならしばらく観察を続けてみろ。ただし、やがて下に降りて冬ごもりのために住み心地の良い場所でサナギになるから追跡が必要だ」と。がっかりしたが、どんな蛾になるのか興味が出て数匹を残した。その後いつの間にかその幼虫達の姿は消えてしまった、冬ごもりか。知人の助言を思い出し、休日の度にサナギを探すがまだ見つからない。彼は自分の庭にミカンの木を植え、アゲハチョウを呼び寄せて毎年サナギまでの確認をし、暖かくなる頃に自分を慕ってくるアゲハチョウを楽しみにしているという。彼は、蝶はその木とそこにいるヒトを臭いで認識しているのだと考えている。

何故アゲハチョウはミカンの木だけに卵を産み付けるのか？調べてみた。蝶は味覚器官（嗅覚ではなかった）を前脚にもっており、味覚細胞には産卵刺激物質に特異的な味覚リセプターが発現しており、それらを識別している。温州みかんの葉から産卵刺激物質として10種類の化合物が単離されているという。分子の世界は昆虫でも存在した（常識か？）。彼の説をある程度支持出来ると思い、彼に知らせねばとEメールをするが返事がない。先日、彼から絵てがみが届いた。インターネットもできない長野の山奥にしばし冬ごもりをすると。蝶（蛾？）そのものだ。

寒い日はまだ続きますが、会員の皆様のご健康をお祈りしつつ、暖かな春を待ちます。　（こ）

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行　平成20年2月1日

編集正責任者：東　敏昭（産業医科大学）
編集副責任者：加藤　貴彦（熊本大学）
編集委員：青木　一雄（大分大学）
青山　公治（鹿児島大学）
石竹　達也（久留米大学）
市場　正良（佐賀大学）
永田　耕司（活水女子大学）
永野　惠（熊本保健科学大学）
日笠　理恵（福岡県市町村職員共済組合）
山城　愛子（沖縄県産業看護研究会）
吉積　宏治（産業医科大学）
（五十音順）

（編集事務局連絡先）
〒807-8555　北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
産業医科大学 産業生態科学研究所
作業病態学研究室（担当：中村、東）
TEL（093)-691-7471　FAX（093)-601-2667
E-mail：saneikyushu@pumpkin.med.uoeh-u.ac.jp